

一九四〇年のフランス敗戦とピエール・ラヴアル

平瀬徹也

はじめに

一九三九年夏に開始された第二次世界大戦が一九四五年春にヨーロッパで、同年夏にアジアで終結したことは周知の通りである。だが、その期間内にフランスがナチス・ドイツと戦って敗れ、一九四〇年六月二二日に休戦条約を結んだ事実は今ではそれほど知られていない（講和条約締結には至らなかつたため、法的な戦争終結とまでは言えないが、結果として第三共和政の廃止という体制変革をともなつたフランスの対ドイツ休戦は、戦争終結以上のものであつたとの言い方もできる）。

ところが、一九四〇年当時はこのフランスの敗戦は世界を驚愕させる一大事件として人びとの多大の関心を集めた。何といつても第一次大戦後のフランスは悪戦苦闘の末にはあれ帝政ドイツの猛攻を防ぎ切つた戦勝国として、またヨーロッパ大陸の最大の陸軍国として、大

戦後のヨーロッパに君臨する大国と認められていたからである。その結果、欧米を中心に一九四〇年後半からいわば「フランス敗戦もの」とでも呼ぶべき著作が、目撃者であつたジャーナリストを含めた当事者たちにより数多く著わされたのは驚くに当たらない。当時の世界でフランスとドイツがそれぞれデモクラシー国家とファシズム国家を代表していた事情もこうした関心を一層強めたと考えられる。フランスの敗戦は単にフランスという一国家の盛衰を示す事件としてではなく、政治体制やそれを支えるイデオロギーの優劣を象徴的に示すバロメーターとも看做されたのである。

そうした事情はヨーロッパを遠く離れた極東の日本においても同様であつた。ここでは翻訳書が中心となつたとはいへ、アンドレ・モローワの『フランス敗れたり』を中心とする一群の著作が邦訳され、あるいは日本人により著述され、言論界ではいわば『フランス敗れたる』現象』とでも呼ぶべき状況が現出したのであつた。そこで¹⁾はフラ

ンス敗戦が単に世界政治上の一大変動として注目されただけでなく、デモクラシー国家とファシズム国家の対抗と前者の敗北として強く意識されていたのはヨーロッパと同様であった。問題関心の共通性は地理的距離を物としなかつたのである。

以上のように世界政治上も政治イデオロギー上も多大の反響を呼んだ一九四〇年のフランスの敗戦であつたが、それだけに問題が多岐にわたる上に公刊史料や文献の数もおびただしい。したがって小稿では軍人のペタン元帥やヴェーガン將軍と並んで政治家として休戦派の中心人物であつたピエール・ラヴァルを中心にこのフランスの困難な時期をたどり、この敗戦の意味を考えてゆきたい。

一

一九三九年九月一日の第二次世界大戦勃発（ドイツ軍による対ポーランド戦の開始）から翌四〇年五月一〇日のドイツ軍の西部攻勢の開始、いわゆる「フランスの戦い」の開幕までの八か月余り、ドイツ軍と英仏連合軍との間には大きな戦闘は無く、「奇妙な戦争」と呼ばれる時期が存在したことはよく知られている。この間、グラディエ首相兼国防相と六八歳のガムラン連合軍最高司令官の指導下のフランス軍八五箇師団（とイギリス派遣軍BEF一〇箇師団）の戦略は徹底した防衛中心のそれで、盟邦ポーランドの敗北と滅亡を傍観したばかりでな

く、本格的戦闘を回避しさえすれば時間は英仏軍に有利に働くとの計算からドイツ軍を刺激する行動は極力避ける方針を採用した。こうして、ドイツ空軍は爆撃を敢行している一方、英仏軍機は当初「空軍活動は追撃と偵察に限定せよ」と命令を受け、爆撃はさし当り許可されなかつた（第一線の抗議により制限は緩和されたが）。

こうした不可解な方針の結果、ポーランド攻撃に努力を集中したため手薄となつた西部戦線のドイツ軍（その中心は未訓練で装備も不十分な予備役兵中心の師団であつた）を攻撃する好機会——おそらく英仏軍にとつての唯一の勝利の機会。それが存在したとして——を逸したばかりではない。長期戦となれば資源にまさるイギリス・フランスが大規模な戦闘無しに大戦に勝利するとの幻想すら国民と軍部に抱かせ、本格的戦闘への心理的準備を著しく損なう結果となつた。じつさいこの間の戦意低下は前線でも銃後でも甚しいものがあつたと言われ⁴。

しかし、イギリス・フランスが自陣営の軍備がとつと予想した一九四一年の到来をドイツが漫然と待つはずもなかつた。そもそも時間には連合国に味方するとの計算自体、その間のドイツの軍備の増強を十分考慮しない一方的独善的な計算であつた。せめてポーランド戦におけるドイツの「電撃戦」戦略の成功から教訓をくみとり自国軍の防衛中心の戦略を再検討していたならば、「奇妙な戦争」期もそれなりに有意義な準備期間となつていたであろうが、わずかに四箇師団の（歩

兵から独立した）戦車部隊の創設が認められた程度で、ドイツの十箇師の機甲師団に匹敵する規模ではなく、マジノ要塞線頼みの陣地戦構想が本格的に再考されることは遂に無かった。

こうしてイギリス・フランスは前大戦の陣地戦の勝利の経験を金科玉条とする戦略に固執するという大きな錯誤を犯したが、それを政府や軍部だけの錯誤や責任に帰するのはいささか皮相と言うべきであろう。前大戦のおびただしい流血や破壊がフランス国民に、最少の犠牲をもって勝利する戦略こそ最上であると確信させ、それが政府や軍部に無言の圧力となっていたことにも留意する必要がある。当時の状況下では国民世論もまた、望ましい戦略は防衛中心の長期戦略であると信じていたのである（いわゆるマジノ線心理）。

一九四〇年五月一日、満を持したドイツ軍が機甲師団と急降下爆撃機を先頭に立ててオランダ、ベルギー、ルクセンブルグを皮切りに西部戦線に大攻勢をかけたとき、フランスでは一時的にはむしろ安堵感、解放感が見られた。国民は一方で決戦を可能な限り先送りするこの有利さを信じながらも、八か月余りの不安定、未決定が心理的に耐えがたい重荷と感じられていたのもまた事実であった。「ニューヨーカー」誌の通信員リーブリングが話しかけたパリ住民は「ドイツの奴らはいまや自分たちと同じサイズの人間を相手にするのだ。われわれはポーランド人やノルウェー人ではないことが分かるだろう」と

楽天的であった。^⑤ また、『タイム』『ライフ』両誌の社主の妻でパリ滞在中のクレア・ブースの言によれば、「人びとが幸福だったというのではない——そんなことが有り得ようか——。しかし彼らも戦争開始を喜んでいた。なぜなら早く始まれば終わりも早いから」^⑥。

だが、楽天的気分がしばむのに大した時間はかからなかった。ドイツ軍の「電撃戦」はフランス側の予想をはるかに超えた激しさとスピードで遂行された。攻撃開始五日後にはオランダが降伏し、一九日後にはベルギーが降伏を余儀なくされた。第一次大戦初期にそれほど激しくドイツ侵入軍に抵抗して連合国の最終的勝利に貢献したベルギーである。フランス自身もたちまち防衛線を突破され、陣容を立て直す余裕すら無かった。ソ連のフィンランド侵攻への対処を誤ったとして総辞職に追い込まれたグラディエ内閣に代って三月二一日に成立していたレーノー内閣は劣勢を招いた責任者と看做されたグラディエ国防相とガムラン最高司令官を五月一八日に解任し、後者に代えて前大戦の勝利の功労者の一人と目されていた中東派遣軍司令官ヴェーガン將軍を任命したが（国防相はレーノー自身が兼務）、敗勢を挽回することはできなかった。当初危惧されたパリ攻撃はドイツ軍がベルギーに進出していた英仏軍の包囲掃滅を優先したため、一刻を争う脅威ではなくなったとはいえ、それにより戦局が左右されるものではなく、その結果生じた時間の余裕を反攻のため有効に利用することもま

まならなかった。むしろ逆に内閣と軍司令部の改造は別の、より大きな困難をレーノー首相にもたらした。

首相は最高司令官の更迭とともに、内閣の権威を高めるため前大戦の「ヴェルダンの英雄」ペタン元帥を副首相として内閣に招いた。老元帥（八三歳）のもつ国民的人気を利用して国民の士気を鼓舞するとの意図は充分理解でき世論にも大歓迎されたが、ペタンもヴェーガン最高司令官も就任後間もなく——就任以前からの指摘もある——軍事情勢を絶望的と判断して対ドイツ休戦を政府部内で主張し、交戦継続を主張するレーノー首相の手を縛ることとなった。首相自身の戦争継続の意志は少なくとも当初は強固であつたと見られるが、軍事情勢に関する軍人たちの専門的判断に逆らうことは首相といえども容易なことではなかつた。まして前大戦の勝利の立て役者と看做され尊敬されてきたペタンとヴェーガンであればなおさらであつた。

二

戦局の急激な悪化とともに対独休戦の可能性が浮上して来ることとなるが、政府部内でそれが最初に議論されたのは五月二五日夜刻に大統領宮で開催された戦争指導委員会 (Comité de guerre) 大統領、首相、陸海空三相ら文民側と軍部の協議機関) においてであつた。ここでの各人の発言は、だれが最初に休戦を口にしたかをめぐって議事録

の不備から、「戦後のパリで何年も荒れ狂つた激しい論争と猛烈な罪のなすり合いを惹起した」ところである。⁽⁷⁾ 首相と最高軍司令官を中心とする個人の責任問題にここで深入りする余裕は無いが、比較的中立の立場にあつたルブラン大統領の回想録によれば、会議では前線視察を終えたばかりのヴェーガン將軍が悲観的な戦況報告をし、それに對しレーノー首相がパリが危うくなつた時政府はどうすべきかヴェーガンに「相談」した。將軍はそれに対し「政府は首都を去るべきではない」との見解を述べた。⁽⁸⁾ 政府の方針を最高司令官に「相談」した首相の態度に問題無しとしないが、厳しい軍事情勢の中での政府移転反対は休戦提起を念頭に置いたものと見ざるを得ない（一八七〇年と一九一四年の二度、フランス政府はポルドーに逃れて戦争を継続している。関係者がこの先例を失念していることは有り得ない）。

これ以後、政府部内で休戦の音頭とりを務めたのはヴェーガン將軍とペタン元帥、とくに前者であつたが、⁽⁹⁾ かれらの場合、戦局の絶望視とならんで、国内の無政府状態と共産黨員による蜂起への恐怖が国軍温存の必要を痛感させていた。六月一二日の閣議でヴェーガンは秩序維持のため軍の崩壊を避けるべく休戦を要求したが、大統領によれば、「この思いがけないほのめかしは閣僚の大多数を驚かせずにはい⁽¹⁰⁾なかつた」。翌一三日の閣議でのかれの発言はさらにエスカレートした。「最高司令官はドラマティックな調子で、たつた今受け取つた情報

によればコミュニストたちがパリで政府を乗っ取り警察を武装解除し、かれらの指導者トレーズをエリゼーの大統領宮に据えたと述べた。この驚くべきニュースはこの数日来ヴェーガンが絶え間なくくり返してきた要求、すなわち、秩序を維持し赤色革命を鎮圧するため残存陸軍が必要だとの要求を強く支持するかに思われた。大臣たちは肝をつぶした⁽¹¹⁾。この情報はパリに電話することにより誤報であることが露見したが、ヴェーガンがその真实性を信じていたかどうかは別にして、かれの即時休戦要求の真のねらいを端無くも示している。

他方、イギリス、フランス、ベルギーら同盟国間の猜疑心は開戦以来さまざまな機会に露呈していた。前大戦と比較しても余りに少ない英派遣軍の師団数など不信の種は当初から尽きなかったが、「フランスの戦い」が展開するにつれフランスの必死の来援要請にも拘わらずイギリスが本土決戦用に温存するため、喧伝されていた空軍機をフランスにわずかしか送らなかつたことはフランス側を大いに失望させた。だが、シャイラーはフランスも自らの航空兵力の全てをなぜか戦鬪に投入しなかつたと主張する⁽¹²⁾。じじつジャンヌネー上院議長ら抗戦派の主張の根拠は、フランスが海外領土に撤退すれば「我われの艦隊と我われの航空機はそこで未だ大きな役割を果たすことができる」というものだった⁽¹³⁾。なぜイギリス空軍機をあてにする前に自国の空軍の活用を試みなかつたのであろうか。

それはともあれ、猜疑心はさらに英派遣軍のダンケルク撤退（六月四日完了）——それにより大陸には英軍は一箇師団しか存在しないことになった——の後は半ば公然たる相互非難にまで至った。同じ六月四日、ペタン元帥はブリット米大使にイギリスはフランス軍の犠牲の上に兵力を温存してドイツとの避けられない講和を少しでも有利なものにしようとしていると非難したが、こうした見解はペタンに限られていた訳ではなく、レーノー首相もブリットに英国への怒りをぶつけている。「ダンケルクの奇跡」はフランス人にイギリスに見捨てられたとの強い感情を生んだ。

六月一日深夜、フランス政府は前日の決定に従ってパリを放棄し、とりあえずロワール河畔のトゥールに向け出発した。しかし、道路は南に向かう避難民の群れで名状しがたい混乱を呈していた。多くの目撃証人がこの時期の避難民の惨状に言及しているが、ここでは外国人記者として南下するドイツ軍に同行したシャイラーのヴィヴィッドな記述を借りる。

まったく無秩序となった八百万人がパリ南方の幹線道路や側道で押し合いへし合いし、身を隠すものとしてなく、食料や水を買ってくと哀訴しあるいは略奪し、生存のため死にも狂いとなり、奔流のようなドイツ軍の手中から逃れようと懸命になり、南へという漠

然とした方向の外には行くべき場所もなく、立ち止まるのはただ大混雑がそれ以上の前進を妨げた時か、敵機がこれらに機銃掃射を加えるので自分たちの哀れな命を救おうと排水溝に飛び込む時ぐらいという避難民の窮状は政府や最高司令部の指導者たちに、打ちのめされたフランス国民がいまや分解しつつあることを強烈に想起させた。⁽¹⁵⁾

他方、政府機関が南方に去ったパリはヴェーガンにより非防備都市と宣言された。それは結果としてパリの歴史的建造物群をドイツ軍の砲爆撃による破壊から救ったが、それはあくまで結果としてそうなったまでで、主として守備軍を無傷のまま南方に撤退させるという軍事的判断に発しており、パリの文化史的価値への敬意に発するものでは必ずしも無かった。それ以上の問題は、パリやその周辺の工場地帯——フランスの軍需生産の七〇%を担っていた——もまた全く無傷のまま残され、今後一九四四年のパリ解放までドイツ軍のため戦車を始めとするあらゆる軍需品を生産し続けたことである。⁽¹⁶⁾レーノー首相を始めとする文民指導者たちは急ぎよ決定された政府機関の移転に忙殺され、パリの処置は念頭になかった。仮に念頭にあったとしても何十万人の労働者の即時失業を意味する工場地帯の破壊を決断し得たとも思われない。

惨状は避難民だけではなかった。後退するフランス軍そのものが避

難民の混乱に巻き込まれて行動不能に陥りつつあった。六月一六日、さらに南方に難を避けてポルドーで開催された閣議——フランスの運命を決した閣議——で読み上げられたジョルジュ前線最高司令官（ヴェーガン最高司令官に次ぐ地位の指揮官）のメッセージは、「状況はさらに悪化した。∴後退する部隊と民間人への糧食補給に重大な局面。道路交通の渋滞と鉄道や橋梁の爆撃のため作戦は困難である。決断をくだすことの絶対的必要」、と訴えていた。⁽¹⁷⁾「決断」が休戦の決断を意味することは誰の目にも明らかである。ルブラン大統領（フランスでは閣議の主宰者でもある）は回想録では「いたるところから来る破滅的なニュースを前にして思考の自由を維持するためには大いなる精神力が必要だった」と比較的冷静に記しているが、同年のペタン裁判では「要するに、軍事情勢の嘆かわしい——わたしはそう言いたい——描写。諸君、これらの打撃に耐え、とるべき決定がそれらに影響されないためには、（我われは——引用者）全く岩か鋼鉄でなければならなかった」とジョルジュ報告に圧倒されたことを認めている。⁽¹⁸⁾閣議は前日提出されていたショータン副首相のドイツにひとまず休戦条件を問い合わせるとの提案を受け容れて——採決は行なわれず——休会した。同夜再度閣議が開かれる予定であったが、疲労の極に達したレーノーは大統領との会談ののち休戦派のペタンを後任首相に推挙して辞職した。

内閣に総辞職をはかることなく政権を投げ出した首相に対する戦後の批判は厳しく、レーノーの懸命の反論——かれは三度回想録を執筆した——も他人を納得させたとは言い難い。小稿ではラヴァル以外の個人的責任の問題に深入りする余裕はないが、国防次官として最後の日々のレーノーを助けたドゴールは回想録で「この恐るべき時期に権力の試練が何を意味するかはその証人であつた者たちだけが知ることができる。休む暇もない昼間と眠れない夜の間に、首相は自身自身にフランスの運命の全責任が負わされるのを感じていた。首長とはつねに悪しき運命にひとりて直面するのだから。：嵐に対してかれは変ることなき強固な意志で立ち向かつた」と同情を惜しんでいない。¹⁹ 自らの軍事理論を政界でほとんど唯一人擁護しつづけた恩人への感謝が影響しているのは否めないが、かれ自身嵐に対してひとり立ち向かつた首長であるドゴールはレーノーの苦しみをよく理解できたのであろう。

三

ドイツに対し休戦条件の詳細を問い合わせるとのショータン副首相の提案——レーノーはその衝撃を「驚天動地の策 coup de theatre」と表現している——の閣議による受け入れは休戦推進派にとっては大きな前進であつた。戦闘継続中に休戦を云々すること自体、軍隊と国民

一九四〇年のフランス敗戦とピエール・ラヴァル

の士気に大きなダメージを与える可能性が大きいし、じじつそうなつた。抗戦派から見ればショータンの真の意図は、かれが当日主張したようにドイツの厳しい要求が知られれば国民は徹底抗戦に向けて一致団結するというものでは決してなく、休戦への軟着陸をねらつた巧妙な一手であつた。²⁰ だが、当時はドイツ側の条件は当然不明であり休戦成就は確実ではなく、さらにオランダ政府が女王をイギリスに亡命させ名目上戦争を継続した実例は記憶に新しかつた。そうした抗戦継続の動きを阻止するため誰よりも寄与したのがピエール・ラヴァル上院議員（元首相）であつた。

ラヴァル自身はフランス敗北の軍事的側面に直接責任を負う訳ではない。一九三六年一月のラヴァル内閣倒壊以後、かれはいかなる閣僚職に就いたことも無かつたし、それ以前もかれは国防関係の閣僚職（陸海空三相）とは無縁であつた。とりわけ三六年春の下院選挙で人民戦線派が勝利を得てブルム内閣が成立して以来、中央右派ともいへばき立場のかれは疎外された存在を強いられ、後述するように第三共和政の議会中心の民主政治に不満をつのらせていた。そうしたかれ自身の苦況を打開するため、ペタン元帥擁立運動に好意を寄せ、自らその機運の醸成に努めていた。²¹ 強烈な自信家であるラヴァルは八三歳の老ペタンの権威の下で政権を実質的にコントロールできると計算したのである（じじつさいにはペタンの権力欲はラヴァルの予想を越えて強烈

だったが)。フランスの軍事的劣勢はそうしたかれの野心に突如現実的可能性をもたらした。

ラヴァルは六月九日パリを離れたが、政府や政治家たちがトゥールからさらに南のボルドーに移動したのを知り、同月一四日夕、同地に赴いた。この日、国会議員といえどもホテル探しに苦労していたとき、かれは休戦派の同志マルケ代議士兼ボルドー市長の紹介で最上等のホテルを用意されたばかりか、市庁舎内のマルケの隣室を事務所として当てがわれたが、そこはただちにペタンかつぎ出しの「陰謀の中心」⁽²²⁾となった。ラヴァルは情報も与えられずに途方に暮れている議員たちに休戦の必要とフランス政府の海外領土への脱出反対とを精力的に説き、ペタン元帥の下への結集を訴えた。「フランスに残り民衆と苦悩を分か合うのがかれらの義務である」とかれは言葉巧みに訴えた。⁽²³⁾

言う迄もなく休戦派にとつての悪夢はかれらから大義名分を奪う政府の国外亡命ないし海外領土での戦争継続であり、共和政においてはそれは大統領、上下両院議長ら政府要人とくに国家元首たる大統領の出国であった。したがってルブラン大統領に対する休戦派の出国阻止の働きかけ——二、三〇人の議員を中心とするこの活動は「ボルドー・コミュニケーション」と呼ばれた——は再三にわたったが、もつとも直接的で威圧的な働きかけを行なったのはラヴァルであった。六月二一日午後

より再現すると。⁽²⁴⁾

ラヴァル、マルケ、ボネ、ベルジェリーら約一〇人（ラヴァル）ないし約二〇人（ルブラン）の議員団はラヴァルに率いられて大統領のオフィスに押しかけた。⁽²⁵⁾ラヴァルは沈黙がちの大統領に大声で「あなたは出立できないし、出立すべきでもない。そうしたほとんど詐欺的な便法により政府がアフリカで、いまや不可能と分っている闘いを継続することを我われは受け容れない」と迫った。これに対しルブランは「事態はそれほど単純ではない……。出立する者もあり、残留する者もある」と反論するが、⁽²⁶⁾ラヴァルは「共和国大統領は国璽を持ち出すことで自身とともにフランス政府を持ち出す。私はいかなる口実、いかなる回り道であれ、あなたがそうする権利を認めない」と抗議した。寡黙なルブランにしばれを切らして「憤激の頂点に達した」ラヴァルはさらに「ヴェーガン將軍とペタン元帥の二人だけが戦争継続が可能かを語る権利を有する。もしかれらが打ち方止めと判断するなら、我われ全員は従わなければならない」と迫った。

だが、説得力に長けたラヴァルは威圧だけに頼りはしなかった。突然声を低め感情を眼に表わして「私は道路を使ってクレルモンから来た。私は敗北の光景を見た。我われは打ち負かされた」と相手の情に訴えた。ついで断固とした口調で「いまや我われは救い出せる限りのものをこの国から救い出さねばならぬ。フランスに奉仕できるのはフ

ランスを去ることによってではない」と続けた。「しかし、敵に占領された土地で捕囚となる危険にさらされてフランス政府はいかにして主権者かつ自由でありうるか」と反論するルブランにラヴァルは、「もしあなたがこのフランスの土地を去るなら、再びそこに足をふみ入れることは無かろう。然り、わが国が最大の苦難にあるその時にあなたが出立を選んだと知れば、だれもがある言葉を口にするだろう。戦線離脱と……。おそらくさらに重大な言葉、裏切りと……。もしあなたが出立したいならそれはあなたの権利だ！ だが、個人の資格でしかそうすべきではない。あなたは辞任すべきだ。：わが国を深淵に導いた人たちの助言を聞かないように……。ああ、なぜあなたはこれほど長い間これらの言に従ったのか？」と続けた。ルブランが「憲法がそれを私の義務とした」と答えると元首相は「私はかれらがフランスに為したすべての悪の故にかれらを憎む」と叫んで会見を終えた。大統領は回想録で、「このような介入は私に何の影響も及ぼさなかったと付言する必要があるか？」と述べているが、モンティニエは、このうち大統領はもはや出立に固執しなくなったと付記した。⁽²⁷⁾

これ以後、ラヴァルが議員たちの私的集まりで、また公式の議員集会（七月九日午前の下院議員集会、午後の上院議員集会、一〇日午前午後の国民議会）でおこなった休戦と第三共和政廃棄のための諸演説の論点は大別して、（一）ダラディエ内閣の宣戦方法の法的不備、（二）

フランスの国際的孤立を招いた歴代の左翼内閣のイデオロギー偏重外交への批判、（三）すでに敗北必至の戦争を続けることの無意味さの三点にあった。

まず、（一）について。ダラディエ前首相は国民の間の厭戦的空気から宣戦布告が議会で否決される可能性をおそれ、戦争予算の採決を求めることで実質上の議会の宣戦布告とした。こうした便法が法律的に問題があるか否かにかかわりなく姑息な方法であるとの印象は否めず、軍事的劣勢が明らかになるにつれ政府批判に足がかりを与えた訳である。宣戦がなお逡巡するフランスの意向に逆ってイギリス主導でなされたことも、元来反英的なフランス保守派の反感を煽った面も見逃せない。

（一）が「ためにする批判」「批判のための批判」という一面をもつのに対し、（二）はラヴァルの本心に発する批判であった。ラヴァルに限らずフランス保守派の反英意識の裏返しとしての親イタリア的心性はムソリーニのイタリアに対しても例外ではなかったが、ラヴァルの場合それは個人的怨念にも裏打ちされていた。かつてラヴァル内閣はイタリアのエチオピア侵略に対する宥和の方針を左翼に批判され、それが一因となって倒壊したが、この左翼の批判は本来親イタリアのラヴァルにとっては反ファシズム・イデオロギーのために対ドイツ同盟の友邦となるべきイタリアを敵陣営に追いやるという国益軽視の愚行

としか考えられなかった。ムソリーニの側のラヴァル評価は決して高くなかったと見られるにも拘らず、ラヴァル自身は対伊関係の修復と強化には自分が最適任であるとの自信（むしろ過信）を一貫して抱き続けていた。一九四〇年春のこの段階では英仏とファシスト・イタリアとの了解の可能性は客観的には消滅していたにも拘らず、独ソ不可侵条約成立によるソ連との同盟の可能性の消滅はフランス右翼のムソリーニ幻想を長引かせていた。（三）についてはラヴァルはペタンやヴェーガンら軍事的権威を引合いに出しさえすればよかった。

四

ドイツ側の休戦条件はようやく六月二一日夕判明した。ルブラン大統領によれば、「休戦条件は厳しくはあっても不名誉な点は何もないと閣議は評価した」⁽³⁰⁾。とはいえ、（一）占領地帯と非占領地帯の区分（占領が国土の三分の二近くに及ぶことへの不満）、（二）軍用機のドイツ引渡し要求、（三）フランス艦隊の武装解除と船籍港での係留、（四）ドイツ人亡命者のドイツ引渡し要求、などをめぐってフランス側は条件緩和を要求した。しかし、ドイツ側は軍用機の引渡し要求を武器を取り外してフランスが保持する（ただしドイツの監視下）と譲歩したが、大枠は変らなかつた。⁽³¹⁾ フランス側が交渉前から一貫して憂慮していたのはフランス艦隊がドイツ側に引渡されて同盟国イギリス攻撃に

利用されることであり、ドイツ監視下であれフランスの諸港に係留と決まったこと、ドイツがそれを戦争目的に使用しないことを「厳粛に宣言」したことによりこの点に関してはフランスの名誉は守られた。しかし、亡命ドイツ人のドイツ引渡しはフランスの名誉を深く傷つけるものであったから、フランス側は抗議したが拒否された。六月二一日夕、協定は仏独代表により署名された。

その二日前の二〇日、ペタン首相は国民への放送でフランス敗北の原因を次のように総括していた。

二三年前ほど我われは強大ではなく、友人も少なかった。子供は余りに少なく、武器も盟邦も余りに少なかった。それこそが我われの敗北の原因である…。

我われは敗北から教訓を引き出すだろう。（第一次大戦の——引（用者）勝利の方、享楽の精神が犠牲の精神に打ち勝った。人びとは奉仕する以上に要求した。人びとは努力を惜しもうとした。そして今日人びとは不幸に際会している。

私は栄光の日々に諸君と共にあった。政府主席として私は暗黒の日々にも諸君とともにあり、今後もあり続ける。諸君も私の傍らに留ってほしい。闘いは同じ性格であり続ける。問題となっているのはフランスであり、その大地、その息子たちである。⁽³²⁾

このペタン演説は自分を含めた軍部の重大な責任に全く言及しない一方的なものであったが、フランス国民のいわば心の琴線にふれた。なぜなら当時フランスの衰退の原因を民主政と国民精神に帰することはペタンや休戦派の専売特許ではなかったからである。六月六日の放送演説でレーノー首相自身が、「我われの第一の義務はこれまでの諸内閣と公共精神の双方に見られた自らの過誤を認めることである。民主主義諸国は長い間、先見の明を欠いていた。祖国の観念、武勇の観念は余りにうとんぜられた。我われはそのことをはつきり言わねばならぬ。歴史のこの章を閉じ勝利の荒々しいエネルギーをもって行動するため⁽³³⁾」と語っていた。

以上のように敗戦原因を理解する限り第三共和政のままの存続は有り得なかつた。一八七〇年の敗戦とともに第二帝政が廃止された先例は余りに示唆的であつた。

フランス政府はボルドーから中部オーヴェルニュのヴィシーに移動し、七月九日と一〇日に憲法改廃のための上下両院の会議と国民議会（両院合同の会議）を開催することを公告した。最悪の交通事情にも拘らず議員たちは困難に打ち克つて温泉町に集まつて来た。その間今は閣僚となつていたラヴァルは元帥に国政変革の工作のすべてを自分に委ねるよう要求し認められた。両院の休会程度を当初考えていたペタ

ンととり巻きたちはラヴァルの成功を危んだが、かれの熱意と自信に屈した。憎まれ役の志願者をあくまで拒む理由はなかつた。⁽³⁴⁾

かれの仕事はこれまで抗戦派であつたエリオ下院議長とジャンヌー上院議長により大いに助けられた。七月九日の下院開会の辞でエリオは、戦場に倒れた同僚議員たちへの長い追悼の言葉ののち、ペタン元帥の下での団結と自己変革を同僚たちに次のように訴えた。「わが国民はその悲嘆の時にペタン元帥の周囲に、かれの名前が万人に呼び起こす畏敬の念の中で結集する。かれの権威の下に確立された一致を乱すことの無いよう用心しよう。我われは自らを変革せねばならず、我われが易きにつかせた共和政をより厳格なものに変えねばならぬ⁽³⁵⁾」。戦後かれは「この七月九日午前、私は元帥が犯そうとしている信頼の悪用とかれが心中で暖めていたクーデタを全く知らなかつた」と弁解するが、⁽³⁶⁾平議員たちと異なりかれがラヴァルの準備する「変革」の内容を予想できなかつたとは考えられない。ラヴァルは現体制への嫌悪を隠そうともしなかつたし、必要な手続き（大統領や両院議長への事前の説明）を欠くことも無かつた。エリオの弁解が憲法改正以後の事態を指したのなら理解できるが。

他方、ジャンヌーがエリオ以上の抗戦派であつたことは『政治日記』の随所に明らかである。⁽³⁷⁾だが、かれもまた七月九日午後の上院開会の辞で、「私はペタン元帥に我われの崇敬の念と、^{ヴェネラシオン}かれの人格の新し

い才能に由来する十全の感謝を捧げる」と元帥を讚美した。そして、ペタン裁判でかれもまた自己弁明したが、かれの弁明はエリオよりは率直だった。「本当のところ選択は有り得たであろうか。この時点で全ての人の目はペタン元帥に向けられていたことは疑う余地がない。かれは全ての手がそこに伸ばされる一種の救命ブイですらあった。かれは確かにその回りに国民が団結し和合する唯一の名前であった」⁽³⁸⁾。ドゴールとかれに従った一握りの人たち以外にこれを否定できる人はほとんどいないことは確かである。

七月一〇日午前の国民議会でのラヴァルの演説はそれまでのかれの主張の集大成ではあるが新しい内容は乏しく、わずかにイギリスに対する敵意がメルエルケピル事件を経験して強まっていること、「それ(新憲法作成——引用者)はフランスのため、最善のとは言わないがもつとも害の少ない講和条件を獲得するためである」と政体変更によりドイツからより寛大な講和を獲得する利点を挙げていることが注目される。⁽⁴¹⁾

「国民による批准」という条件付ではあったが新憲法作成の全権をペタン元帥に与えるとの政府提案は一〇日午後の国民議会で五六九票対八〇票(棄権一七票)という予想外の圧倒的多数で可決された。

この驚くべき結果はいかにして達成されたのであろうか。ラヴァルが「この世でもっとも口先がうまく、説得力ある人物の一人」⁽⁴²⁾であつ

たとしても、かれの異常な才能にのみ帰することはできない。エリオを先頭にフランスは名だたる雄弁家にこと欠かなかった。

ブルム元首相はペタン裁判で、「それは恐怖であった。街頭におけるドリオの徒党の恐怖、クレルモン・フェランに駐屯するヴェーガンの兵士たちの恐怖、ムーランに駐屯するドイツ軍の恐怖」。「人びとがふりまいていた風評は『投票しない者たちは今夜自分のベッドで寝れないだろう』であり、じっさいヴィシーで反対票を投じた人で心底から自由に出られると信じた人は一人も無かった」と語った。⁽⁴³⁾

たしかにユダヤ人で社会党党首のブルムが恐怖を強く感じたのは理解できる。ドリオの人民党員たちは首相時代に党首から市長職を取りあげたブルム(とドルモワ元内相)に街頭で露骨に敵意を示していたし、ヴェーガンの軍事独裁の可能性はラヴァル自身が一〇日の演説で議員たちにほめかしたところであった。しかし、議員たちの大多数が恐怖に動かされて賛成投票したととらえるのは「全真相を語ってはいない」⁽⁴⁴⁾し、かれらの責任感をあまりに軽視するものであろう。むしろ「ラヴァルの最大の味方はじっさい恐怖でも恩着せ^{パトロン}でもなくペタン元帥であった。：一九四〇年のペタン元帥と一九五八年のドゴールのこの点での対比は(フランス人には——引用者)不人気かもしれないが、それでも印象的である」とのワーナーの説明は納得のいくものである。⁽⁴⁵⁾ それに「議員たちの意気阻喪と罪悪感」(コウル)を加えれば一

九四〇年七月一〇日は充分説明できる。「その後かれらは気を取り直し、これらすべてを否認するに至ったが、当時はかれらは、祖国をこれほどの低さにおとしめたのが議会政治ないしそれがフランスでおこなわれていたような議会政治の弱点と濫用であることを認める気持ちになっていった」⁽⁴⁶⁾。旧抗戦派のジャンヌネーさえ七月八日の日記に「私が見たと信ずるところによれば、かれらを支配しているのは大変立派な感情である。かれらは政治的な過失や悪習を自覚し、それらを後悔する気になっている」と記したし、⁽⁴⁷⁾八月一四日にはその後のペタンへの失望を書きつらねながらも、「元帥殿、昨日の体制が厳しい判決に値することをだれも否定しない。七月一〇日がそれを証明した」と記した。⁽⁴⁸⁾

さらに当時ラヴァルも議員たちもイギリスも間もなく敗北すると見ていたことが強調されねばならない。⁽⁴⁹⁾ドイツの勝利が予想される以上、フランスにできることは災厄の中で可能な限り厳しくない講和条件を獲得することであると考えられ、対独同調を通じてそれが実現されると考えたのである。⁽⁵⁰⁾

七月一〇日の国民議会による第三共和政廃止が合法的か否かについてはさまざまに論議されてきたが、ルブラン自身は「然り、ひとたび休戦の原則が認められた以上、当然ヴィシー政府は合法的に設立された」と記している。⁽⁵¹⁾ペタン裁判でも元大統領は「私は私の降板が威圧

ないし何であれその種のものの結果であると決して考えたことはない」と断言した。⁽⁵²⁾それも当然であった。七月一三日、ペタンはルブランを訪問し、「大統領殿、つらい時がやって来ました。あなたは十分国家に奉仕された。だが、国民議会は新しい状況を造り出しました。」と大統領辞任を迫ったのに対し、ルブランは「私にはお構い下さるな。私は法が私の精神的支持をかち得ない場合でも生涯を通して法の誠実な奉仕者でありました。私はいま一度法に従うことに何の不満もありません。国民議会は判決を下しました。全てのフランス人は従わねばなりません」と答えた。⁽⁵³⁾翌日かれは選挙区のイゼール県に向けヴィシーを去った。

なぜ政府要人のみならず国会議員たち——とくに抗戦派の人たち——はその主張を貫徹するため海外領土に出国しなかつたのであろうか。その理由は徹底抗戦派のオリオール元蔵相（社会黨員。七月一〇日に反対投票した八〇人の一人。戦後の第四共和政の初代大統領）の回想録が明らかにしている。

（六月）一九日夕、（アルジェへの——引用者）出立はともあれ決定済であった。一代議士として私は議会事務局と国家元首の後を追うだろう。だが、私は市長である。その地方は占領されるだろう。私の義務は私の住民の中に残ることであり、私の同胞を独り占領軍

の前に放置しないことである。親友たちがアルジェリアで我われの共通の理念を公権力の傍らで守ってくれるだろう。

ボルドーを去る前に私はエリオに挨拶に行った。：ドイツ軍がこれの町（リヨン——引用者）を占領しようとしていた。：私を出迎えたかれの最初の言葉は「私もあなたのように行動して同胞の中に行かねばならない」だった。⁽⁵⁴⁾

市長として市民を見棄ることができなかったオリオールやエリオに国外脱出を拒んだペタンやラヴァル（パリ郊外オーベルヴィリエ市長）を真に批判する権利があるか大変疑わしい（戦後かれらは休戦派を厳しく批判したが）。このエピソードを自著で紹介したワースは「休戦の決まった週とその後、ほとんどのフランス人の即時的反応は疑わしい冒険に乗り出すことではなく、動かないことだった」と評している。⁽⁵⁵⁾

オリオールもエリオも善意にあふれた人間的な人々であり、責任感にも欠けるところはなかった。しかし、責任感がときに要求する冷酷さに耐えられなかった典型的な第三共和政の議会人であった。かれらが海外領土に赴いたならば無名の国防次官ドゴールよりも亡命政権の首長に選ばれる可能性はずっと——親英米派として知られるエリオの場合はるかに——大きかった。しかし、かれらはドゴールたり得なかったのである。その頃、もう一人の抗戦派レーノーはペタン新首相

から駐米大使への就任を打診されて乗り気になっていた。ペタンのこの不注意な提案は側近たちに反対されて実現しなかったが、レーノーが休戦派の内閣を外国で代表する用意があったことは記憶してよい。抗戦派と休戦派は同じ政治文化を共有し、両者を隔てる溝はそれほど底の浅いものであったということであろう。

おわりに

ヴィシー政府期にまで記述を進めるのは小稿の範囲を越えるので、戦時中のラヴァルに関するエピソードを一つだけ紹介して結びとしたい。

フランス解放後ラヴァルは対独協力派の中心人物として死刑判決を受け処刑された（ペタンは特赦により死刑から終身禁固刑に減ぜられた）。そのかれのいくつかの罪状の一つはドイツの要求に応じてフランス人労働者数十万人を、フランス人捕虜の帰国との交換という形式であったが、ドイツに送った——一部は自発的に、多数は強制されて出発——事実であった。やがてフランスは連合軍により解放され、ヴィシー派要人はドイツに連行され同国内を戦火に追われて転々とした。その途中でかれらはやはり戦火を避けて移動するフランス人労働者たちに遭遇した。現場はたちまち不穏な空気に包まれた。労働者たちは自分たちの不運の元兇を発見したと考えたからである。すると突

然ラヴァルが一人で車を降り労働者たちに話し始めた。

かれは自らの政策の理由を説明した。それは必要な政策だった。かれは損失をより小さくしなければならなかった。かれはフランスについて、かれが守らなければならなかった大義について語った。かれはフランスの田園について語った。かれを野次るために、おそらく殺すために集まったこれらの労働者たちは沈黙し、納得する様子がありありと見えた。一人また一人とかれらは進み出てラヴァルと握手した。ラヴァルは幸福そうであった。

労働者たちはラヴァルの前途を案じてかれらに同行するよう勧めさせた。ラヴァルは感謝しつつ断った。かれらは手を振って別れの挨拶をした、と対独協力者の女優コリンヌ・リュシエールは回想録に記した。⁽⁵⁶⁾

この挿話を説得力抜群のラヴァルが労働者たちを巧みに丸め込んだと説明することは容易だし、おそらく間違っていない。しかし、両者が価値観を共有していたからこそこれほど困難な説得が成功したとも言える。それは外の世界がどうあれユダヤ人の運命がどうあれフランス人の小さな幸せを守りたいということであろう。

ラヴァル裁判に際してドゴール政府の法相テトジャンは、陪審員た

一九四〇年のフランス敗戦とピエール・ラヴァル

ちの被告への非礼を詫びつつ担当弁護士に語った。「ラヴァル氏の自国への貢献の全てを私は熟知している。だが、問題のすべては、フランスの肉体を護るためその魂を失うことが必要であったか否かを知ることである」⁽⁵⁷⁾

トムソンの評するように「これこそラヴァルが理解しようとして、理解できもしなかった問題であった。ラヴァルには肉体が失われたとき魂の救済について語ることは無意味であった。かれの気質と人生哲学のすべてがそうした観念に全く無縁であった」⁽⁵⁸⁾。逆に抵抗派にとっては魂が失われたとき肉体の救済について語ることは無意味であった。両者がフランスと言うとき脳裡にあるのは別のことであった。

註

(1) 筆者の手元にあるものだけを挙げる。刊行年は①(昭和一五年)以外はすべて昭和一六年。

- ① アンドレ・モーロア(高野彌一郎訳)『フランス敗れたり』大観堂。
② 同(高野訳)『フランス戦線』大観堂。③ ジャン・モンティニー(倉田大介訳)『フランスの再興』高山書院。④ アンドレ・シモーヌ(羽田三吉訳)『余は糺弾す——何故フランスは敗れたか——』三省堂。⑤ 尾崎達男『フランス敗戦の真相』霞ヶ関書房。⑥ 井上勇『フランス・その後』鱒書房。⑦ 淡徳三郎『戦争と自由』改造社。⑧ 小松清『フランスより還る』育生社。

ちなみに筆者の所有する『フランス敗れたり』は昭和一六年一月刊の第五五版だが、一六年四月刊の②の巻末広告には①が二〇〇版刊行

となっている。総部数は不明だし、後者の数字はにわかに信じられないが、大変な出版ブームであったことはうかがわれる。井上勇は帰国講演（昭和一六年二月）に際して関係者の殆んどがすでに①を読んでいたことに驚いている。⑥二二七頁。

- (2) 他にも、華やかな文化首都パリの陥落という文化的衝撃、文化愛惜的感情がこの敗戦に一層の関心を呼んだことは、『パリ最後の日』『パリ陥落』といった書名が好んで使われた点にもうかがうことができる。cf. Alexander Werth, *The Last Days of Paris* (London, 1940), Herbert R. Lottman, *The Fall of Paris, June 1940* (New York, 1992). 他に筆者未見だが、石田布佐子『巴里落ちまで』高山書院、昭和一六年。後者の広告には、「欧州近代文明の落日に照らし出された、…崩れゆく伽藍の如き欧州の姿」とある。③の巻末広告参照。

- (3) William L. Shirer, *The Collapse of the Third Republic: An Inquiry into the Fall of France in 1940* (London, 1970), p.585. 井上勇訳『フランス第三共和制の興亡』東京創元社、昭和四六年。II' 一二二頁。訳文は筆者のもの。以下も原書を参照できたケースではすべて同様。

- (4) 「パリでも小都市や町々でも、この奇妙な戦争で苦労したり心地よい安楽な生活を断念したりする必要など無いとの感情が育っていた」 「五月一〇日の早朝、フランス軍はすきを突かれた。前線部隊の一〇%から一五%は家族訪問休暇中だった」。Shirer, *op. cit.*, pp.512, 584. 邦訳II' 二九、一二二頁。事後にフランスの敗戦を深く反省したモローワも五月一〇日朝、「休暇を田舎で過ごすつもり」で準備していた。モローワ『フランス敗れたり』一二六頁。

- (5) Lottman, *op. cit.*, p.29.
 (6) *Ibid.*, p.32. その他 pp.21, 99 も参照。シモーヌ前掲書、二九二頁。
 (7) Shirer, *op. cit.*, pp.706-709. に詳しい。引用箇所は p.706. 邦訳 II'

二八二頁。

- (8) Albert Lebrun, *Témoignage*, (Paris, 1945), p.72. ペタン裁判での証言ではルブランは「ヴェーガン將軍は政府の出立におそらくあまり好意的ではなかったと私は信ずる」としか語っていないが。Haute Cour de Justice, *Procès du Maréchal Pétain* (Paris, 1945), p.45. 筆者の利用したペタン裁判記録は官報特別版(?)の集成なので、他の文献における引用頁数とは全く異なる。

- (9) ペタンは前面に出ることは少なく、発言する機会は多くなかったが、名前からくる発言の重みと、閣僚でないヴェーガンは状況説明以外は閣議を退席する建前であったから、その影響力は大きかった。

- (10) Lebrun, *op. cit.*, p.75. その他、ペタン裁判でのレーノーの証言 *Procès du Maréchal Pétain*, p.15 参照。

- (11) Shirer, *op. cit.*, p.772. 邦訳 II' 三六九頁。

- (12) *Ibid.*, p.586. 邦訳 II' 一二九頁。

- (13) Jules Jeanneney, *Journal politique, septembre 1939-jullet 1942* (Paris, 1972), p.66. 「航空機の相当部分は残存している」 *Ibid.*, p.70. 本書は回想録ではなく日誌(子息の歴史学者による校訂公刊)であり四〇年当時の認識を示す。

- (14) Shirer, *op. cit.*, pp.729-730. 邦訳 II' 三二四頁。出典は米外交文書。個人的に親仏反英の米大使はペタンと同一の見解をローズベルトに報告している。なお、邦訳書はペタンの発言の一部を誤ってヴェーガンの発言としている。

- (15) *Ibid.*, p.749. 邦訳 II' 三三九頁。

- (16) *Ibid.*, pp.743, 751. 邦訳 II' 三三一、三四二頁。

- (17) Paul Reynaud, *Au cœur de la mêlée, 1930-1945* (Paris, 1951), pp. 836-837.

- (18) Lebrun, *op. cit.*, p.83, *Procès du Maréchal Pétain*, p.46.

- (19) Charles de Gaulle, *Mémoires de guerre* (Paris, 1954), édition de 1999, p.73.
- (20) Reynaud, *op. cit.*, pp.803-806, d°, *Mémoires 2, envers et contre tous* (Paris, 1963), pp.421-422. 両書には重複が多い。シヨータン提案の巧妙さは抗戦派のレオン・ブルムが戦後の議会調査委員会の証言で「わたしはそれが誠実なものだったと今も信じている」と語っている点にも示されている。Assemblée Nationale, *Les événements survenus en France de 1933 à 1945, Témoignages*, Tome I, p.261.
- (21) かれはこの考えをおそらく一九三七年四月頃、一九三八年三月には確実に抱いていた証拠がある。Geoffrey Warner, *Pierre Laval and the Eclipse of France* (London, 1968), pp.135-136.
- (22) Shirer, *op. cit.*, p.778, 邦訳' II' 三七八頁。
- (23) Jean, Montigny, *Tout le vérité sur un mois dramatique de notre histoire* (Paris, 1940), p.21. 邦訳' 一六二—一七頁。Warner, *op. cit.*, p.171.
- (24) Montigny, *op. cit.*, pp.25-30. 邦訳' 三二—三九頁。Lebrun, *op. cit.*, pp.91-93, *Procès du Maréchal Pétain*, p.48 (Déposition de Lebrun) et p.187 (celle de Laval) 引用は特記しない限り最も詳細なモンティニーの回想による。
- (25) 「私は面前に常軌を逸し自制心を失い大げさなジェスチャーをする連中が一度は声を挙げるのを見た」Lebrun, *op. cit.*, p.92.
- (26) 次の事実を念頭に置いた発言であろう。すなわち六月一八日、ルブランが両院議長とペタン新首相を招いて開きたいわゆる「四ブレジダンの会合」でエリオとジャンヌネーは政府のアルジェ移転を強く主張し、ルブランも同意した。ペタンは自らの本土残留を主張するが「他の人たちが去ることに反対しない」とした。結局、ルブランの発案で政府を二分し、ペタン以外はアルジェに移ることとなった。さらにペタンは「首相の権限と国璽を(アルジェに移る——引用者)シヨータン副首相に託すと述べた」。この「きわめてちぐはぐな解決」(ルブラン)は直接面談ではしばしば気弱なペタンの同意を得たとはいえず、休戦派にとっては到底容認できるものではなかった。*Procès du Maréchal Pétain*, p.47 (Déposition de Lebrun).
- (27) Lebrun, *op. cit.*, p.93, Montigny, *op. cit.*, p.30. 大統領がモンティニーの記述を意識していることは確実であろう。
- (28) ラヴァルは関知しなかったが、ダラディエはイタリアとの関係改善のため一九三八年一〇月と三九年三月の二度、ラヴァル派遣をムソリーニにひそかに打診したが拒否されていた。Warner, *op. cit.*, pp.146, 156.
- (29) 一九三九年三月一八日、ヒトラーと会見したムソリーニは「これらの国々(英仏——引用者)との協力は問題外である。我われはかれらを憎む。したがってイタリアの参戦は不可避である」と語っていた。*Ibid.*, p.157.
- (30) *Procès du Maréchal Pétain*, p.48. 休戦派主導のペタン内閣では予想される評価である。ルブランは自らの評価を巧みに避けている。
- (31) Shirer, *op. cit.*, pp.851-860. 邦訳' II' 四七八—四九〇頁。協定全文は Montigny, *op. cit.*, annexes, 邦訳' 一六五—一七二頁。ただし、邦訳は抄訳。
- (32) Philippe Pétain, *Quatre années au pouvoir* (Paris, 1949), p.49.
- (33) Reynaud, *Au cœur de la mêlée*, p.713.
- (34) Shirer, *op. cit.*, pp.877-879. 邦訳' II' 五二—五三頁。Warner, *op. cit.*, pp.193-194.
- (35) Herriot, *op. cit.*, p.136.
- (36) *Ibid.*, loc. cit..
- (37) とひわけ' Jeanneney, *op. cit.*, pp.58, 74.
- (38) *Ibid.*, annexes, p.437.

- (39) *Ibid.*, p.438.
- (40) 七月三日、フランス艦隊がドイツの手におさるのを恐れたイギリスがマルジェリアのオラン郊外の軍港に停泊中のフランス艦船を砲撃し、一三〇〇人の乗組員を死なせた事件。
- (41) 一〇日の国民議会の完全な議事録は、*Les événements... Rapport*, Tome II pp.479-497. ラヴァル演説の抜粋は、Samuel M. Osgood (ed.), *The Fall of France, 1940: Causes and Responsibilities* (Boston, 1965), pp.10-12. 引用箇所は p.12. 議事とラヴァル演説の要領を得た紹介は、Warner, *op. cit.*, pp.206-208.
- (42) David Thomson, *Two Frenchmen, Pierre Laval and Charles de Gaulle* (London, 1951), p.37. ルブランも「かれは柔軟性と説得力と理解力の大きな資質を有する」と認める。Lebrun, *op. cit.*, p.104.
- (43) *Procès du Maréchal Pétain*, pp.77, 78.
- (44) Warner, *op. cit.*, p.209.
- (45) *Ibid.*, p.210. 恩着せとはラヴァルが議員たちに新体制下でのしかるべき地位を示唆したことを指す。
- (46) Hubert Cole, *Laval, A Biography* (London, 1963), p.92.
- (47) Jeanneney, *op. cit.*, p.95.
- (48) *Ibid.*, p.123.
- (49) Lebrun, *op. cit.*, pp.124, 129.
- (50) *Ibid.*, p.130. ルブランはこの部分をラヴァルの考えとして紹介している。
- (51) *Ibid.*, pp.122-123. 引用は p.123. 同じ見解の代表は Alexander Werth, *France 1940-1955* (London, 1956), p.33. 野口名隆・高坂正堯訳『フランス現代史』I、三四頁。否定的な見解の代表は、Shirer, *op. cit.*, pp.917-919. 邦訳、II、五六六―五六八頁。
- (52) *Procès du Maréchal Pétain*, p.49.
- (53) Lebrun, *op. cit.*, pp.109-110.
- (54) Vincent Auriol, *Hier... Demain* (Paris, 1945), Tome I, pp.82-83.
- (55) Werth, *op. cit.*, p.29. 邦訳、I、三〇頁。ただしエリオはリヨンのドイツ系住民の保護と安全のための五人の人間の一人にドイツ軍によって指名されていた。Herriot, *op. cit.*, p.129-132. これが残留の一つの理由となったことは考えられる。だが、ペタン元帥の下への結集を訴えた本人が海外に出立するとは考えにくいことは確かである。
- (56) 原著未見。Werth, *op. cit.*, p.117. からの再引用。邦訳、II、一二四頁。
- (57) Jacques Baraduc, *Dans la cellule de Pierre Laval* (Paris, 1948), p.145.
- (58) Thomson, *op. cit.*, p.122. 「ラヴァルとヴィシー政府の全存在理由に對立するドゴール派の立場の精髓はドゴール派のテトシジャン法相により要約された」*Ibid.*, loc. cit.

〔本学名誉教授（西洋史）一九九七―一九九年度総合研究一六（近現代における戦争終結過程の研究——比較文化的、歴史的、国際関係論的アプローチ——）研究員〕